

静岡県立大学短期大学部

研究紀要14 - 3号 (2000年度) - 2

大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポート と無気力傾向 達成動機を媒介要因とした検討

福岡 欣治

Perceived social supports from family and from friends
and enervation of college students:
Examination of mediating effects of achievement motivation

FUKUOKA, Yoshiharu

要旨：家族および友人についての知覚されたソーシャル・サポートが自己充実的な達成動機を高めることによって無気力傾向に陥るのを防ぐように作用しているのかどうかを、大学1年生 243名を対象とした質問紙調査によって検討した。男女ともに、友人サポートは自己充実的な達成動機を介して学業および大学生活全般についての意欲低下を防ぐ効果をもつことが示された。家族サポートも部分的に無気力傾向に対する効果を示し、これは男子よりも女子においてやや顕著であった。競争的な達成動機は、ソーシャル・サポートと無気力傾向の関係に介在していなかった。これらの結果は、達成動機の媒介効果に関して堀野・森(1991)の先行研究を追証するとともに、家族と友人によるサポートの効果が異なることを指摘するものである。

問 題

ソーシャル・サポートの概念は、対人関係と心身の健康をつなぐ接点として、近年多くの研究が報告されてきている。ソーシャル・サポート研究では、抑うつや孤独感、あるいはストレス反応などを従属変数とし、サポートがそれらの心理的苦痛ないし不適応症状におちいるのを防ぐ保護的な効果をもつことを報告している場合が多い。若年者を対象とした研究でも同様であり、たとえばわが国でも、嶋(1991, 1992)、和田(1992)、福岡・橋本(1992)をはじめ、数多くの報告がある。

ところで、大学生の無気力、無関心が問題になって久しい。最近は特に人格障害的なアパシー（たとえば笠原，1984；山田，1987；土川，1990；下山，1996）よりも、一般学生にも広く見られる意欲の乏しさ、無気力傾向が問題とされてきている（鉄島，1993；下山，1995）。そこでは、日本の大学生がたとえば授業には出てくるが積極的な関わりに乏しく、一方でサークル活動やアルバイトには熱心であるというように、生活領域のある面では消極的に、ある面では積極的に学生生活を送る姿が指摘されている（下山，1995を参照）。そこで本研究では、大学生とりわけ大学1年生における生活領域別の無気力傾向とソーシャル・サポートとの関連性について検討する。基本的な仮説は、サポートの存在がこれら無気力傾向を防ぐように作用する、というものである。従来わが国においてこのような観点に立った研究は少ないが、保育系専門学校生における学業成績との関連を検討した川原（1999）や看護学生における学習意欲との関連を検討した菊池（2000）の研究、さらに周囲とのサポート関係と学業成績との関係を扱った海外での研究（たとえばCutrona, Cole, Colangelo, Assouline, & Russell, 1994）などから、この基本仮説を導くことができる。

しかし、大学生の無気力は、サポートがあれば防がれるという単純なものではないであろう。特に、新入生にとっては大学生活は厳しいストレスに満ちたものというより、大学受験を終えた直後であり、むしろ「五月病」とも言われるように、明確な目標を見失いがちな状況ともいえる。そこで本研究では、ソーシャル・サポートと無気力の間、個人の達成動機が介在していると考えられる。すでに、堀野・森（1991）は、達成動機を自己充実的な側面（他者や社会の評価よりも自分なりの基準への到達をめざす）と競争的な側面（他者をしのぎ、他者に勝つことで社会的に評価されることをめざす）に分け、大学生における知覚されたソーシャル・サポートと抑うつとの間に自己充実的な達成動機が介在することを報告している。このことから、無気力傾向に関しても自己充実的な達成動機の介在が想定される。

ただし堀野・森（1991）では、サポート源については、項目内容から事後的に「親的」「友情的」なサポートに分類し両者で類似の結果を得ているものの、それぞれの対人関係がおよぼす効果それ自体は検討されていない。他方、大学生を含む青年期の心理的発達において、友人関係と親子関係が果たす機能は異なるとされている（たとえば松井，1996を参照）。とりわけ高校生から大学生にかけての青年期後期は、親からのいわゆる心理的離乳が起こり、対人関係の中心が親子関係から友人関係へと移行しまた親子関係それ自体も再構成されていく時期にあたる（Hollingworth, 1928；落合・佐藤，1996）。ソーシャル・サポート研究においても、家族と友人に代表される複数のサポート源が個人に対して異なる影響をおよぼすことが指摘されてきている（たとえばAntonucci, 1985；福岡・橋本，1997）。これらのことから、実際の親および友人とのサポート関係が達成動機を介して無気力傾向におよぼす影響は、両者で何らかの違いがあると想定される。

そこで本研究では、実際の家族と友人についての知覚されたソーシャル・サポートすな

わちそれぞれの対人関係からのサポートの入手可能性を調べ、大学生の無気力傾向におよぼす達成動機を介した家族および友人についての知覚されたソーシャル・サポートの影響について検討することを目的とした。

本研究における仮説は、以下のとおりである。

仮説：サポートの入手可能性は主に自己充實的達成動機を高めることで無気力傾向に陥ることを防ぐように作用するが、この影響関係はサポート源すなわち家族と友人によって何らかの違いがある。

方 法

被調査者

D大学の1年生243名（男子95名，女子148名）を被調査者とした。平均年齢は18.85歳（SD = 0.67）であった。なお自宅通学者の比率は男女とも6割以上であった。

測定内容

ソーシャル・サポート 福岡・橋本（1997）などを参考に作成した6項目（情緒的内容と手段的内容の各3項目：Appendix参照）を用い、家族と友人のそれぞれについて、入手可能性を5件法（1．全くあてはまらない～5．大変あてはまる）で評定させた。

達成動機 堀野・森（1991）で用いられた24項目を用いた。競争的達成動機（10項目）と自己充實的達成動機（14項目）の2側面からなる。前者の項目にはたとえば「競争相手に負けるのはくやしい」「どうしても私は人より優れていたいと思う」などがあり、後者の項目にはたとえば「何でも手がけたことには最善をつくしたい」「いろいろなことを学んで自分を深めたい」などがある。評定はソーシャル・サポートに合わせて原版の7件法から変更し、5件法（1．全くあてはまらない～5．大変あてはまる）とした。

無気力傾向 下山（1995）による大学生の意欲低下領域尺度を用いた。「学業」「授業」「大学生活」の3領域・各5項目の計15項目からなる。項目例としては、学業領域では「勉強に関する本を読んでもすぐに飽きてしまう」など、授業領域では「授業に出る気がしない」など、大学生活領域では「学生生活で打ち込むものがない」などがある。評定はソーシャル・サポートに合わせて原版の4件法から変更し、5件法（1．全くあてはまらない～5．大変あてはまる）とした。

実施方法

1997年10月（入学約6か月後）に、心理学関係科目の受講者を対象にして授業時間内に集団で実施し、その場で回収した。所要時間は20～30分程度であった。

結果と考察

各測度の下位尺度構成に関する因子分析的検討

最初に各測度について因子分析（主成分分解，プロマックス回転）をおこない、下位尺度

構成の妥当性について検討した。その結果，達成動機と無気力については原版通りの因子構造が認められた。ソーシャル・サポートも家族，友人でそれぞれほぼ予想どおりの2因子解が得られたが，一部に若干不安定な項目があり，因子間相関も高かった。そこで，達成動機と無気力については下位尺度別，ソーシャル・サポートについてはサポート源別に6項目全体で，それぞれの合計点を指標として用いるものとした。係数は，達成動機とソーシャル・サポートについてはいずれも0.73以上であった。無気力傾向に関しては0.65前後と比較的低いものもみられたが，項目数も勘案し，使用には耐えうるものと判断した（Table 1 参照）。

各指標の平均値

続いて，各指標の平均値を算出した（Table 1）。男女差のt検定では，どの指標についても有意ないし傾向での差が認められた。家族および友人のサポートと自己充實的達成動機では女子の方が，競争的達成動機と無気力傾向の3側面では男子の方が高得点であった。達成動機に関して堀野・森（1991）は男女別の検討をおこなっていないが，ソーシャル・サポートに関する結果は福岡・橋本（1995）など先行研究と基本的に一致している。また無気力傾向に関しても，スチューデント・アパシーが主として男子学生に特有な現象とされてきたこと（たとえば笠原，1984）に符合する結果ともいえる。ただしこの点については一般的な無気力傾向が男子のみに限られることを意味するわけではなく（鉄島，1993を参照），むしろ顕著な男女差ではない点に注目すべきであるかもしれない。

Table 1 各指標の平均値とSD，男女差のt検定結果

指 標	男 子			女 子			t 値	
	平均	S D		平均	S D			
サポート	家族	23.77	3.86	0.77	25.73	3.71	0.77	3.96**
	友人	20.67	4.06	0.76	23.45	3.15	0.73	5.65**
達成動機	自己充實的	55.49	7.22	0.81	58.33	6.86	0.85	3.08**
	競争的	36.77	6.69	0.84	34.84	5.58	0.79	2.33*
無気力傾向	授業	13.77	4.82	0.64	12.61	3.91	0.65	1.96+
	学業	15.60	3.69	0.76	14.59	3.48	0.65	2.15*
	大学生生活	12.97	4.00	0.72	12.05	4.10	0.80	1.73+

** p < .01 * p < .05 + p < .10

指標間の相関関係

さらに、ソーシャル・サポート、達成動機、無気力傾向の関連性を検討するため、まず指標間の相関係数を算出した。なお各指標の平均値に有意な男女差がみられたことから、集計は男女別におこなった。

その結果、競争的達成動機は他の指標と何ら有意な相関がみられなかった。これに対して、自己充實的達成動機は友人サポートと正の、学業および大学生活での無気力傾向と負の有意な相関を示しており、これらは男女に共通であった。また家族サポートと自己充實的達成動機との相関は、女子において有意であった。さらに、家族および友人のサポートと無気力傾向との関係については、男子では家族サポートと大学生活全般についての意欲低下との間に有意傾向の負の相関が認められたのみであったが、女子では家族サポートが授業・学業・大学生活のすべての領域について、友人サポートも授業と大学生活全般の各生活領域についての意欲低下と負の有意な相関を示していた。なお、家族サポートと友人サポートの関連性は、女子の方がやや強いようであった。

これら相関分析の結果は、競争的達成動機ではなく自己充實的達成動機がサポートと無気力傾向の双方と有意な関連性をもつという意味で、両者の間に介在する可能性を示唆している。また、達成動機に対する友人サポートの影響は男女とも共通であり、家族サポートに比べた場合の相対的な重要性をうかがわせる。しかし家族サポートが意味をもたないというわけではなく、友人サポートとは異なる形で影響しているように思われる。

Table 2 指標間の相関係数（右上：男子，左下：女子）

指 標							
サポート							
家族	---	.27**	.08	.06	-.12	.10	-.19+
友人	.44**	---	.35**	.02	-.12	.11	-.11
達成動機							
自己充實的	.27**	.35**	---	-.004	-.27**	-.13	-.37**
競争的	.002	.05	.05	---	-.04	.03	-.01
無気力傾向							
授業	-.29**	-.33**	-.47**	.04	---	.21*	.38**
学業	-.26**	-.07	-.07	.09	.28**	---	.36**
大学生活	-.26**	-.28**	-.52**	.01	.48**	.29**	---

** p < .01 * p < .05 + p < .10

達成動機を介したサポートの効果：パス解析による検討

家族と友人のソーシャル・サポートが達成動機を介して無気力におよぼす影響を検討するため、「家族および友人のサポート 競争的および自己充實的達成動機 各生活領域における意欲低下（無気力傾向）」という仮説的な因果モデルを構成して、男女別にパス解析をおこなった。

その結果、男女ともに、友人サポートが自己充實的達成動機を高め、それが学業および大学生生活の意欲低下を防ぐことを示すパスが有意であった。また、女子では家族サポートが授業意欲低下を防ぐ直接のパスも有意であり、家族サポートが自己充實的達成動機を高める影響も10%水準ながらみられた。なお男子でも、家族サポートは学業意欲に対し直接の効果をおよぼす傾向がみられた。

これらの結果は、基本的に本研究の仮説を支持している。すなわち、サポートの入手可能性は主に自己充實的達成動機を高めることで無気力傾向に陥ることを防ぐように作用するが、この影響関係は家族ないし友人というサポート源によって若干の違いがあるといえる。また、家族サポートの影響に関して若干の男女差が認められることも明らかにしている。なお後者の点に関しては、福岡（2000）が従来の研究を概観しつつ指摘しているように、青年期において家族との結びつきがもつ重要性は徐々に弱まるものの、その傾向は男子においてより顕著にみられることと対応している。

以下、男子におけるパス図をFigure 1に、また女子におけるパス図をFigure 2に示す。図中には有意ないし有意傾向であったパスが示されている。

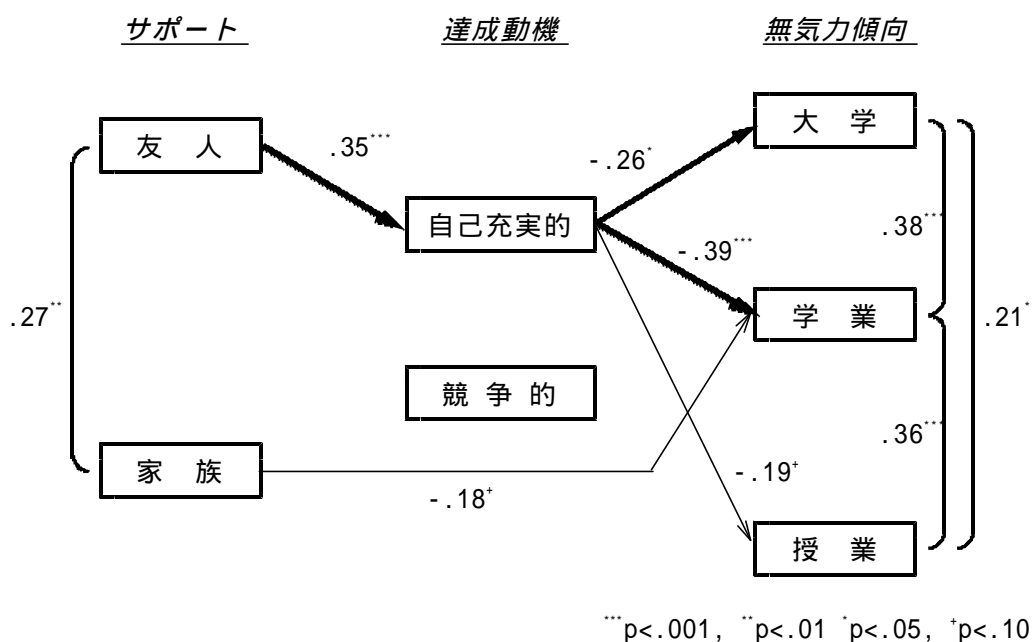


Figure 1 男子におけるソーシャル・サポート，達成動機，無気力傾向の関係

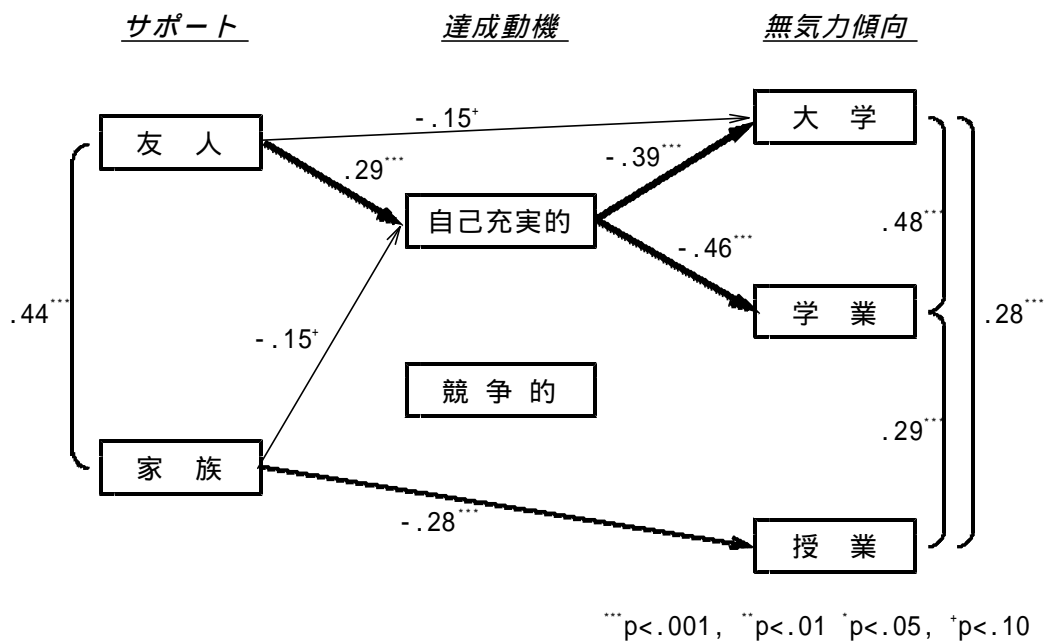


Figure 2 女子におけるソーシャル・サポート，達成動機，無気力傾向の関係

要約と展望

本研究の結果は，入学後半年を経た大学生の男女において，必要に応じて友人からサポートを得ることができると認知していることが，自己充実的な達成動機を高め，学業や大学生活全般での無気力傾向を防ぐ作用をもつことを示している．とりわけ，友人とのサポート関係の豊かさは，他者に勝つことよりも自分なりの目標達成を促すことで，大学生活の様々な領域における生活意欲に影響していると言える．なお，女子では家族サポートの有意な効果もみられ，女子における家族との心理的なつながりの強さをうかがわせる．また達成動機を介さない効果も部分的ながら見出されたことは，友人とは異なる家族サポートの役割を示しているといえよう．このように，本研究は達成動機の媒介効果に関して堀野・森（1991）の先行研究を追証するとともに，家族と友人によるサポートの効果が異なることを示すことによって，その知見を拡張するものといえよう．

ただし，本研究では縦断的な調査デザインをとっておらず，またソーシャル・サポートを入手可能性のみで測定しているため，無気力傾向の生起とその抑制の時系列的なメカニズムについては多くの示唆を引き出すことができない．また，ソーシャル・サポートに関してはサポート源の違いのみならず情緒的あるいは手段的といったサポート内容別の検討がおこなわれる場合も多いのであり，そうした検討が可能な測定項目の構成にも配慮する必要がある．総じて，本研究には堀野・森（1991）の発展的追試研究として意義があると思われるが，今後さらにこれらの課題を克服した研究が必要である．

註

本稿は、筆者らによる日本心理学会第62回大会（1998）での発表データをまとめなおしたものである。

謝 辞

本調査にご協力くださいました学生の皆様方に、厚くお礼申し上げます。また、本研究は橋本宰先生（同志社大学文学部教授）の指導による真鍋咲子さん（平成10年3月同志社大学心理学専攻卒業）の卒業研究で用いられたデータをもとに、新たな観点を加えて再構成したものです。橋本宰先生と真鍋咲子さんに対し記して深く謝意を表します。

引用文献

- Antonucci, T.C. 1985 Social support: Theoretical advances, recent findings and pressing issues. In I.G.Sarason & B.R.Sarason (Eds.) Social support: Theory, research, and applications. Hague: Martinus Nijhoff. Pp.21-37.
- Cutrona, C.E., Cole, V., Colangelo, N., Assouline, S.G., & Russell, D.W. 1994 Perceived parental social support and academic achievement: An attachment theory perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 369-378.
- 福岡欣治 2000 青年の援助とサポート 西川正之(編) シリーズ21世紀の社会心理学4 援助とサポートの社会心理学 北大路書房 Pp.10-25.
- 福岡欣治・橋本 宰 1992 個人のもつ特定のサポート源に関するソーシャルサポートの測定 健康心理学研究, 5(2), 32-39.
- 福岡欣治・橋本 宰 1995 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, 43, 185-193.
- 福岡欣治・橋本 宰 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68, 403-409.
- Hollingworth, L.S. 1928 The psychology of the adolescent. New York: Appleton.
- 堀野 緑・森 和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39, 308-315.
- 笠原 嘉 1984 アパシー・シンドローム 高学歴社会の青年心理 岩波書店
- 川原誠司 1999 青年後期における友人サポートの学業成績への影響 宇都宮大学教育学部紀要・第1部, 49, 49-64.
- 菊地昭江 2000 看護学部1年生の学習意欲とソーシャルサポートとの関連 日本看護学研究会誌, 9(4), 1-7.
- 松井 豊 1996 親離れから異性との親密な関係の成立まで 斎藤誠一(編) 人間関係

- の発達心理学 4 青年期の人間関係 培風館 Pp.19-54.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 嶋 信宏 1991 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39, 440-447.
- 嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 下山晴彦 1996 スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究, 44, 350-363.
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究 関連する諸要因の検討 教育心理学研究, 41, 200-208.
- 土川隆史(編) 1990 スチューデント・アパシー 同朋舎
- 和田 実 1992 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, 40, 386-393.
- 山田和夫 1987 スチューデント・アパシーの基本病理 長期縦断的観察の60例から
平井富雄(監修) 現代人の心理と病理 サイエンス社 Pp.355-373.

(2001年2月20日 受理)

Appendix ソーシャル・サポートの項目内容

- 1) やっかいな問題に頭を悩ませているとき，冗談を言ったり一緒に何かやったりして，私の気をまぎらわせてくれるだろう
 - 2) 私が精神的なショックで動揺しているとき，なぐさめてくれるだろう
 - 3) 私が急にかなり多額のお金を必要とするようになったとき，そのお金を援助してくれるだろう
 - 4) 私が病気で数日間寝ていなくてはならないとき，看病や世話をしてくれるだろう
 - 5) 私が急に引っ越しなどで人手が必要になったり，数日間大切なペットの世話ができなくなったりしたとき，手助けをしてくれるだろう
 - 6) 私が自分にとって重要なことを決めなくてはならないとき，それについてアドバイスしてくれるだろう
-